

イタリア語の詩作法について

上 杉 昭 夫

ポエジーアは広義には詩一般を指し示す語であるが、狭義には個々の詩を作る場合の詩作法を意味する。本稿では、ポエジーアは一定のリズムのある*verso*（詩行）を結合する術であると言う狭義の意味に解しておく。こうした術が何時ころ確立したのかは判然としない。ダンテや彼の友人でありかつ師であったグイード・カヴァルカンティには既に一定の詩形が用いられているが、イタリア文学史の巻頭を飾るサン・フランチェスコ（彼は生涯に一度も詩人たろうとしたことはなかった）の詩にも、プロヴァンスの吟遊詩を模倣したシチリア派の詩人たちの頭目ジャコモ・ダ・レンティーノの詩にも、またダンテが清新体派の祖として仰いでいたグイード・グイニツェリの詩にさえもいまだ明確な詩作法を見いだす事は困難である。そこでシチリア派の詩人たちによって少しずつ考案されて行き、カヴァルカンティ、ダンテからペトラルカの時代に至って確立されて行ったと考えるのが妥当だとおもわれる。

Altissimu, onnipotente, bon Signore, /

Tue so' le laude, la gloria e l' honore et onne benedictione/

Ad te solo, Altissimo, se konfano, /

et nullu homo ène dignu Te mentovare/

(San Francesco d' Assisi, *Laudes Creaturarum*)

いと貴き、全能の、良き主よ、／称賛、栄光と誉れと全き祝福は貴方のものです。／いと高貴なる貴方にのみ相応しいのです、／いかなる人も貴方を名指すに値しないのです。

Meravigliosamente

ことさらに

un amore mi distringe

一つの愛が我を締め付け

e mi tene ad ogn' ora

たえず我を捕らえている

(Giacomo da Lentino, *Meravigliosamente*)

Al cor gentil reppaira sempre amore 雅な心にはいつも愛は帰依する

come l' ausello in selva a la verdure, 森の小鳥が緑に戻ってくるように

nè fe' amor anti che gentil core

雅な心の前に愛をつくらず

nè gentil core anti ch' amor, natura:

愛の前に雅の心を造らず、自然（創造主）は：

(Guido Guinizelli, *Al cor gentil*)

ポエジーアの基礎である *verso*（詩行）は、一定のリズムによって結ばれた一定の音節数

からなりたっている。イタリア語の verso (詩行) の名称はイタリア語の特長である“後ろから二番目の音節にアクセントのある語”で終わる verso を基準にしている。Verso はラテン語の *vertere* (向を変える) から派生した語であり、ここから次の行に移るとの合図である。

Sparsa le trecce mòrbide	柔らかき編み毛解け
sull' affannoso pètto,	喘ぐ胸元に、
lenta le palme, e ròrida	そっと掌
di morte il bianco aspètto,	死汗に濡れ白き顔を横たえる
glace la pia, col trèmolo	敬虔な貴女は震える
sguardo cercando il cièl.	眼差しもて天を仰ぎつつ。
Cessa il compianto: unànime	哀悼止み：満場の
s' innalza una preghiera:	祈り高まり
calata in su la gèlida	冷たき額に降りる、
fronte, una man leggièra	軽やかな手
sulla pupilla cèrula	青い瞳に
Stende l' estremo vèl.	最後のベールをかける。

(Manzoni, Morte di Ermengarda <L' Adelchi)

たとえば上の詩の一行目、三行目、五行目、七行目、九行目、十一行目のように、詩行が“後ろから三番目の音節にアクセントがある語”で終わる場合は実際には一音節増えているがその音節は勘定には入れない。六行目と十二行目のように“最後の音節にアクセントがある語”で終わる場合には一音節減るが計算上は一音節加える。つまり主リズム・アクセントの位置に一音節加えた音節数によってその名称がつけられる。上の詩はいずれも前から六番目の音節に主リズム・アクセントが落ちるのでセツテナリオ (七音節詩行) と呼ばれている。だが詩行の正確な音節数を知るには、一詩行内の一語の内に本来ならば分節(iato)となる隣り合わせの複母音を一音節と見なす規範を考慮する必要がある。これを母音融合(Sineresi)と言い、それが二語以上に渡る場合は母音結合(Sinareft)と言う。だがときには詩人によってはその複数の母音を分けて二つの音節と見なす場合もある。これを母音分割(dieresi)、二語以上に跨がる場合は母音分離 (Diarefe) と称している。

Ch' eran con lui, quando l' amor divino (Inf, I -39)

In giù son messo tanto perch' io fui (Inf. XX 137)

しかし詩行の末尾が“アクセントのある母音” + “アクセントの無い母音”の場合は各々の母音がそれぞれ一音節を形成するものとみなす。上の一行目の *lui* は母音融合、二行目の *fui* は母音分割である。次の下線部は母音分割 (Dieresi) の例である。

Odoravano i fior di vitalba	匂っていた仙人草の花が
per via, le ginestre nel greto	道すがらに、金盞花が河原に
<u>ali</u> avano prima dell' alba	夜明まえに翔んでいた
le rondini nell' ulivetto.	燕がオリーブ畠の中を。
<u>Ali</u> avano mute con volo	黙々と飛んでいた

nero, agile, di pipistrello ;
e tuttora gemea l' assiolo,
che già spincionava il fringuello

蝙蝠の黒い素早い飛翔と共に
いまだに木菟が呻いていた、
すでに花鶏が囀っていた

(Pascoli, Alba)

これらの規範に従うと、イタリア語の詩行は偶数音節詩と奇数音節詩行に分けられる。偶数音節詩行と奇数音節詩行の組み合わせは禁じ手とされてきた。単なる約束事なのか、ほかに例えば偶数と奇数と組み合わせを忌み嫌う宗教的な意味合いでも込められているのか定かではない。以後アクセントと言う場合はリズム・アクセントを指すものとする。

偶数音節詩行

クワテルナリオ（四音節詩行）：常に三番目の音節に主アクセントがある。一番目の音節にもアクセントを持ち得る。単独で用いられることは極めて稀であり、次ぎの詩の二行目、四行目、六行目、八行目、十行目と十二行目のようにほとんど八音節詩行（オットナリオ）と共に使用されている。

Paranzèlle in alto màre

沖合に帆掛け舟

Bianche bianche

白い白い

io vedèva palpitàre

私は帆のはためきをみつめていた

còme stànche

疲れたような

ò sperànze, ale di sògni

嗚呼 希望よ、夢の翼よ

per il màre

海を行く

Volgo gli occhi ; e credo in cielo

見上げると、空に

rivedère

また見えるようだ

paranzelle sotto un velo,

薄雲の下に帆掛け舟が

nère nère

黒い黒い

ò memorie, ombre di sogni

嗚呼追憶よ、夢の影よ

per il cièlo !

空をゆく！

(Pascoli, Speranze e memorie)

セナーリオ（六音節詩行）；五音節目と二音節目にリズム・アクセントを持っている。

Non è pasqua d'òvo ?

卵の復活祭じゃないの？

per oggi contà

今日は考えたのよ

di dàrteli, i pièdi

お前にあんよさせようと

È pàsqua : non vèdi

復活祭よ：見えない

il cèrcine nòvo ?

新しいお帽子が？

Andiàmo a mìmmi,

あんよに（散歩に）行きましょう

lontàno lontàno

遠くへとおくに

Din dòn... Oh ! ma dìmmi :

ディンドン…ああ！でも答えて：

non vèdi ch' ho in màno

見えないのね手にしているのが

il cèrcine nòvo.

新しいお帽子を。

Le scàrpe d' avvìo ?

よちよちあんよのお靴は？

Sei mòrto : non vèdi,
mio piccolo cièco !
Ma mèttile ai pièdi,
ma pòrtale tèco,
ma dìglielo a diò,
che màmma ha filàto
sei nòtti e sei di,
sudàto, vegliàto
per fàrti, oh ! così !
le scàrpe d' avvìo !

(Pascoli, Il morticino)

オットナリオ（八音節詩行）は当然の事ながら二つアクセントをもっている。一つは七音節目にもう一つは三音節目に。さらに一音節目と五音節目にもアクセントを持ち得る。

L' àlba pèr la valle nèra
sparpagliò le greggi biànche :
tòrnano òra nella sèra
e s' aràmpicano stànche :
una stèlla le codùce.

Tòrna vià dalla maèstra
la covàta, e pàssa lènta :
c' è del biòndo alla finèstra
tra un basilico e una mènta :
è Maria che cùce e cùce.

Per chi cùci e per che còsa ?
un lenzuòlo ? un bianco vèlo ?
Tutto il cièlo è color ròsa,
rosa e oro, e tutto il cielo
sulla tèsta le rilùce

Alza gli òcchi dal lavòro :
una làgrima ? un sorrìso ?
Sòtto il cièlo ròsa e òro,
chìni gli òcchi, chìnò il viso,
èlla cùce, cùce, cùce.

(Pascoli, La cucitrice)

次ぎの詩は現在もフィレンツェのカーニバルで踊り歌われる余りにも有名なパッラータの冒頭（反復節）の部分である。

Quànt' è bèlla giovinèzza
che si fùgge tuttavìa !

なくなってしまったのね: 見えないわね
わたしの小さな盲目ちゃん! 注: 盲目はそのままに
でもそれあんよに履いて
一緒に持ってお行き、
神様にこれ言ってね、
母さんが紡いだって
六日六晩
汗して、夜なべして
お前に作るために、ああ! こうして!
よちよちあんよのお靴を!

夜明暗い谷間に
放った白い羊の群れ:
いま帰ってくる夕べに
疲れて登ってくる:
一番星が(群れを)導いていく。
広小路から帰って行く
子供達が、ゆっくりと通り過ぎて行く:
金髪が窓辺に
バジリコとミントの間に:
縫っているマリーアだ
誰のために縫っているそして何のために?
敷布? 白いベール?
空全体は薔薇色
薔薇色黄金いろ、空全体が
彼女の頭上に照り輝いている。
仕事から目を上げている:
涙? 笑み?
バラ色の、黄金色の空の下で
眼を伏せ、顔を伏せ
彼女が縫っている、縫っている、縫っている。

青春は麗しい
されど儚し

hì vuol èsser lièto, sia :
di domàn non c'è certèzza

(Lorenzo De' Medici, Canzone di Bacco)

デカシッラボ（十音節詩行）は九音節目、六音節目、三音節目にアクセントを持っている。
更に一音節目にもアクセントを持ち得る。

S'òde a dèstra uno squillo di tròmba
a sinistra rispònde uno squillo:
d'àmbo i làti calpestio rimbòmba
da cavàlli e da fànti il terrèn

(Manzoni, Coro del Carmagnola)

奇数音節詩行

クイナーリオ（五音節詩行）は四音節目以外に、一音節目または二音節目にアクセントを持つ：

Ò, bell' andàre
per bàrca in màre,
vèrso la sèra
di primavèral
(Redi, Bacco in Toscana)

Viva la chiòcciola
viva una bèstia
che unisce il mèrito
alla modestia
Essa all' astrònomo
e all' architètto
fòrse nell' ànimo
destò il concètto
del cannochiàle
e delle scàle
Viva la chiòccila,
càro animàle.

(Giuseppe Giusti, La chiocciola)

セツテナリオ（七音節詩行）はエンデカシッラボ（十一音節詩行）に次いで最もよく用いられ、六音節目以外に最初の四音節のいずれかに連続することなく一つまたは二つの第二アクセントを持つ。

Tù nella tòrre avita
pàssello solitàrio
tènti la tua tastiera,
còme nel santuàrio

楽しみたき者は楽しみ：
明日は定かならず。

右にラッパの響聞こえ
左に一響応え
両側から馬と兵士の足音
大地（戦場）を轟かす

おお すばらしきかな
小舟で海行くは
春の夕べに

万歳蝸牛
慎ましさを
美德となす
生き物万歳。
天文学者の
建築家の
恐らくその心中に
着想を目覚めさせた、
遠眼鏡と
梯子の
万歳蝸牛
愛しい生き物よ

汝先祖の塔の内なる
一人ぼっちの雀よ
汝の指板に触れる、
内陣の中で

mònaca prigioniera
 l'òrgano, a fiòr di dita
 (Pascoli, Il passero solitario)
 Sògno d' un dì d' estàte
 Quànto scampanellàre
 trèmulo di cicàle !
 Stridule per filàre
 movèva il maestràle
 le fòglie accartocciàte
 Scendèa tra gli òlmi il sòle
 in fàsce polveròse
 èrano in cièl due sòle
 nùvole, tènui, ròse
 due bianche spennellate
 in tutto il cièlo turchino.
 Sièpi di melogràno
 fràtte di tamerice.
 il pàlpito lontàno
 d' una trebbiatrice
 L' àngelus argentìno...
 dov' ero ? Le campàne
 mi dissero dov' èro
 piangèndo, mentre un càne
 latràva al forestièro
 che andàva a càpo chìno
 (Pascoli, Patria)

捕らわれの尼僧が
 指先でオルガンに触れるように
 夏の一日を夢見る
 なんと激しい
 蟬の震鳴
 並木には北西風に
 カサカサと舞う枯れ巻葉
 楡の木陰に
 沈む太陽
 挨拶れになって
 空には雲二つだけ
 やわらかな、薔薇色の、
 白二筆
 紺碧の空全体に。
 石榴の生け垣
 ギョリュウの茂み、
 脱穀機の
 遠くの響
 アンジェラスの鐘の銀音...
 私は何処にいた？ 鐘鐘が
 私に言った何処に居るかを
 嘆くように、片や犬が吠えていた
 頭を垂れてゆく
 他所者に

ノベナリオ（九音節詩行）は常に三つのアクセントを持っている。人音節目、五音節目と二音節目に。

E tàcito, è grìgio il mattino
 la tèrra ha un odòre di fùngghi ;
 di gòcciole è pièno il giardìno
 (Pascoli, Il bacio del morto)
 O màmma, o mammina, hai stiràto
 la nuòva camìcia di lino ?
 Non c' era laggiù tra il bucàto,
 sul bòssolo o sùl biancospino.
 Su gli òcchi tu tièni le màni...
 Perchéè ? non lo sài che domaàni... ?

どんよりと黙した朝
 地には茸の匂い
 庭園は露に満つ
 嗚呼マンマ、マンマ、アイロンした
 新しいリンネルのシャツに？
 あっちの洗濯物の中に無かったよ
 薬莢の上にもサンザシの上にも
 (母さん) お手を目にやって...
 どうして？知らないの明日は... ?

din don dan, din don dan

ディン ドン ダン、ディン ドン ダン

(Pascoli, Sera festiva)

しかしつぎの詩節の最初と三番目の詩行のように違ったリズムを持つ場合もある。

C'è una voce nella mia vita

我が命の中に一つの声がある

che avvèrto nel pùnto che muòre :

消失せんとする間に気付く :

voce stànca, voce smarrìta

疲れた、途方に暮れた声に

col trèmito dèl batticuòre

胸の打ち震え共々

(Pascoli, La voce)

ノヴェナリオ (九音節詩行) はイタリア詩の中では滅多に用いられることはなかったが、幸にもパスコリによって、上の詩の一行目、三行目のように新たなリズムの息吹が吹き込まれた。

イタリア詩の中で最も美しく気品があり、かつ変化にとんだ詩行はエンデカシッラボ (十一音節詩行) であると見なされている。この詩行は途中で“休止” (pausa) があり、それぞれがそれ自身で一詩行と見なし得るほどである。二つの部分は決して同じ長さではなく、一方がより長く、いっぽうがより短くなる。その各々が違ったリズムを持ち得る。

Nel mezzo del cammin/ di nostra vita

我らが人生の歩みの半ばにて

Mi ritrovai/ per una selva oscura

我は暗き森に居た

chè la diritta via/ era smarrìta.

真つすぐな道が見失われていたが故に。

(Dante, La divina commedia, Canto primo)

Gemmea l'aria, il sole così chiaro

大気は玉、陽はかくも明るく

che tu ricerchi gli albicocchi in fiore

君は花咲く杏を探す

e del prunalbo l'odorino amaro

サンザシの若き匂い

senti nel cuore...

胸に感じ

(Pascoli, Novembre)

詩節(strofe)

一定数の詩行が結合されて完全な文を形成する。これを詩節と言う。詩節の詩行はほとんど常に韻(rima)によって結合されている。韻とは二語またはそれ以上の語の間でアクセントのある母音から後ろの母音と子音の完全な同一性を言う : dorore と amore と calore ; carità, girerà と papà は韻を踏んでいる。

全ての詩節は詩行で形成されている。詩行は全て同じ長さであることも、そうでないことも有り得る。同じ長さでない場合は、前述のごとく全てが奇数音節詩行かあるいは偶数音節詩行でなければならないと言う約束がある。だから十一音節詩行は七音節詩行または五音節詩行に替えることができ、八音節詩行は四音節詩行と交替しうる。恐らく息継ぎ上イタリア詩の中で一番長い十一音節詩行だけは単独で用いることができる。それゆえ sciolto (拘束されない) という名称を持ち、叙情詩、叙事詩や外国語の詩の翻訳に幅広く使われてきた。

ディスティコ (対句) ; 接吻韻(rima baciata: AA/ BB/ CC...)による二つ詩行で形成されている。

Nella torre il silenzio era già <u>alto</u> .	塔の中はもう静まりかえっていた
Sussurravano i pioppi del rio <u>Salto</u>	サルト川のポプラの樹が囁いていた
I cavalli normanni alle lor <u>poste</u>	ノルマンディ産の馬たちが馬房で
Frangean la biada con rumor di <u>croste</u>	もぐもぐとかいばを食んでいた

(Pascoli, La cavallina storna)

テルツィーナ (三行詩節) : 三つの十一音節詩行で形成される詩節であり、最初の詩行が三番目の詩行と韻を踏み、二番目の詩行が次の詩節の最初と三番目の詩行と韻を踏む。この繰り返しである。従って最後の一行は最後の三行詩節の二番目の詩行と韻を踏む。

ABA/ BCB/ CDC/ DED/ E...XYX/ YZY/ Z

テルツィーナは《神曲》の韻律である。

Per me si va nella città <u>dolente</u> ,	我をくぐりて苦しみの市に行かん、
per me si va nell' eterno <u>dolore</u> ,	我をくぐりて永遠の悲しみの中に行かん
per me si va tra la perduta <u>gente</u> .	我をくぐりて失われし人々の内に行かん。
Giustizia mosse il mio alto <u>fattore</u> :	わが高き主が正義を動かしめ
fecemi la divina <u>potestate</u> ,	神聖なる力我を造りたもう
la somma sapienza e' l primo <u>amore</u> .	至高の知恵 第一の愛。
Dinanzi a me non fuor cose <u>create</u>	私の前に造られし物無し
se non etterne, e io ettera <u>duro</u> .	永遠ならざれば、されど我は永遠に続く
Lasciate ogni speranza, voi ch' <u>entrate</u> .	全からく望を捨てよ、汝ら来たらん者は

(Dante, Inferno, Canto III)

クワルティーナ (四行詩節) : 閉鎖韻(rima chiusa)ABBA または交互韻(Rima alternativa) ABAB の四つの十一音節詩行からなる詩節である。次の詩はパスコリの生地サン・マウロの周辺を背景にした長い詩の冒頭の部分である。因にセヴェリーノはパスコリの第一の友人セヴェリーノ・フェッラーリであり、彼自身も詩人でありボローニャ大学のカルドゥチの後継者となった。フェッラーリの死後、パスコリがその後を継いだのである。

Sempre un vilaggio, sempre una <u>campagna</u>	いつも一村、いつも一田園
mi ride al core, (o piange), <u>Severino</u> :	我が胸に微笑む、(あるいは嘆く)、セヴェリーノ :
il paese ove, andando, ci <u>accompagna</u>	里を歩いて行くと我らに付いて来る
l'azzurra vision di San <u>Marino</u>	サンマリーノの青き影
sempre mi torna al cuore il mio <u>paese</u>	いつも我が里が我が胸によみがえる
cui regnarono Guidi e <u>Malatesta</u> ,	ここにグイード伯とマラテスタ侯が君臨し
cui teene pure il passatore <u>cortese</u> ,	ここを街道の王、森林の王なる、
re della strada, re della <u>foresta</u> .	義侠の渡し守も支配した

(Pascoli, Romagna)

セスティーナ (六行詩節) ABABCC と韻を踏む六つの十一音節詩行からなる詩節である。古くは聖歌に用いられたが近代では諧謔的な詩に用いられた。

Donne, perchè, se qualche volta, a <u>caso</u> ,	ご婦人方、何故だか、時に何げなく
gli occhi senza pensarci in me <u>volgete</u> ,	眼を私に向けられると

io vi sento esclamare ; “Guarda che naso !” あなたが泣か叫ばれるのが聞こえます：なんて鼻！
 E sotto i baffi poi ve la ridete ? あとでこれを忍び笑いをなさるのですか？
 L’ornamento piu bel d’ un uomo integro 完全な男の最も素晴らしい飾りが
 vi desta, donne mie, l’ umore allegre ? ご婦人がた、愉快な気分になりましたか？

(Gaudagnoli, Il naso)

オッターヴァ・リーマ（八行詩節）：ABABABCC と韻を踏む八つの十一音節詩行からなる詩節である。スタンツァ（stanza）とも言われる。極めて気品のある詩節と見なされており、様々なジャンルの詩に用いられたが、特にアリオスト、タッソ等の偉大な叙事詩人達に用いられた。

Le donne, i cavallier, l’ arme, gli amori, 貴婦人方、騎士殿、兜鎧、恋愛
 le cortesie, l’ audaci imprese io canto, 雅の綻、勇猛な戦を我は歌わん
 che furo al tempo che passaro i Mori アフリカのムーア人が海を越え
 d’ Africa il mare, e in Francia nocquer tanto, フランスを荒らし回った頃に在りしことを
 seguendo l’ ira e i giovanili furori トロイヤーノの死の仇を討たん事を誓れとす
 d’ Agramante lor Re, che si diè vanto 彼らが王アグラマンテの
 di vendicar la morte di Troiano 怒りと若き復讐心に付き従いて
 sopra Re Carlo imperator romano. ローマ皇帝カルロ王の御治世に

(Ariosto, Orlando furioso, Canto I, 1)

Canto l’ arme pietose e’ l Capitano 我は憐れみ慈悲深き軍勢（兵卒）とその頭目を
 che’ 1 gran sepolcro liberò di Cristo: 彼は偉大なるキリストの聖地を解放し：
 molto egli oprò co’ l senno e con la mano: 才知と手腕をもって大いに働いた：
 molto soffrì nel glorioso acquisto: その輝かしき勝利に苦悩した：
 e in van l’ Inferno vi s’ oppose, e in vano 空しく地獄がそれにたちふさがった、
 s’ armò d’ Asia e di Libia il popol misto: 空しく武器をとったアジアやリビアの
 混成の民が：

Il ciel gli diè favore, e sotto a i santi 天は彼に味方した、そこで聖なる見印のもと
 segni ridusse i suoi compagni erranti. さすらいの相棒を引き揚げた。

(Tasso, La Gerusalemme liberata, Canto I, 1)

ノーナ・リーマ（九行詩節）：滅多に用いられなかった。八行詩節（スタンツァ）にその六番目の詩行と韻を踏む一詩行を付け加えた詩節である。従って韻形式は ABABABCCCB となる。

ソネット：カンツォーネやバツラータと同じように元来は音楽と密接に結び付いていた。その最も共通の形式は二つの四行詩節と二つの三行詩節に分けられる十四の十一音節詩行で構成されていることである。韻の形式は様々である。

Tanto gentile e tanto onesta pare いと優雅で誠実におもわれる
 la donna mia quand’ ella altrui saluta 我が淑女が他の人に挨拶するときは、
 ch’ ogne lingua deven tremando muta, 舌は震え黙さずにはおれない、
 e li occhi no l’ ardiscon di guardare. 眼は彼女を見つめるにあたわず。

Ella si va, sentendosi laudare,
benignamente d' umiltà vestuta;
e par che sia una cosa venuta
da cielo in terra a miracol mostrare.

Mostrasi sì piacente a chi la mira,
che dà per li occhi una dolcezza al core,
che' ntender no la può chi no la prova:
e par che de la sua labbra si mova
un spirito soave pien d' amore
che va dicendo a l' anima : Sospira.
(Dante, La vita nuova xxvi)

La vita fugge e non s' arresta un' ora,
e la morte vien dietro a gran giornate,
e le cose presente e le passate
mi danno guerra, e le future anchora;
e' l rimembrare e l' aspettar m' accora
or quinci or quindi, sì che' n veritate
se non ch' i' ò di me stesso pietate,
i' sarei già di questi pensier fora
Tornami avanti, s' alcun dolce mai
ebbe' lcor tristo; e poi da l' altra parte
veggio al mio navigar turbati i venti
veggio fortuna in porto, e stanco omai
il mio nocchier, e rotte arbole e sarte
e i lumi bei, che mirar soglio, spenti.

(Petrarca, Rerum vulgariarum fragmenta CCLXXII)

カンツォーネ；叙情詩の中で最も高貴かつ最も複雑な形式がカンツォーネである。反復節（ripresa）を持たない幾つかの同じ韻律構造のスタンツァから構成されている。ただ一番最後のスタンツァは congedo（暇乞）と言われ、より短く、構造も違っている。カンツォーネの一スタンツァは様々であるがバッラータの構造と類似点が多い。常に fronte（前部）と sirma（後部）に分けられ fronte は二つの piede（脚）に sirma は二つの volta（転）に分けられる。

fronte と sirma の間に二番目の piede の最後の詩行と韻を踏む chiave（鍵）と呼ばれる一詩行が挿入されることもある。詩行はほとんど十一音節詩行と七音節詩行に限られている。

I piede	[Donne ch' avate intelletto d' amore	愛を解するご婦人方よ
		i' vo' con voi de la mia donna dire,	貴方がたに私の淑女のことを語りたい
		non perch' io creda sua laude finire,	彼女の賛美を尽くしているとおもうからではなく、
		ma ragionar per isfogar la mente.	我が思いを吐露せんがために

彼女は賛辞を耳にしつつ歩み行く、
品よく慎ましき衣をまといて：
天上から地上にきたようだ
奇跡を示す為に。

彼女を見つめる人にはかくも麗しく
眼から心に甘美を与えてくれる。
それを味わうことなき者はそれは解せず：
彼女の口元からは発するようだ
愛にあふれた妙なる霊が。
魂に“ため息をつけ”と語っているような

人生は儂い、一時もとどまらず
死が速足で後ろに迫っている
今の物と過ぎ去りし物とが
我を苦しめる、未来のことはなおさらに
回顧と期待は我を深いかなしみに陥れる
ここかしこで、されば実は
我我が身を慈しむことなからずば
我はもうこれらの思から逃れていたであろうに
この惨めな心にかつて甘美なこと有りせば
我が面前に帰り来よ；されどなお
我が船旅に風乱れ
湊は嵐（しけ）、我が船頭つかれはて、
帆柱、帆綱壊れ
見慣れし美しき光（恋人ラウラの瞳）も失せし。

II piede	Io dico che pensando il suo valore, Amor sì dolce mi si fa sentire, che s' io allora non perdessi ardore, farei parlando innamorar la gente	彼女の徳を思うと、 かくも甘美なる愛神が我に聞かしめるのである。 我そこで熱意失せずば 語りて人々を恋いせしめるであろう..
I volta	E io non vo' parlar sì altamente, ch' io divenisse per temenza vile; ma tratterò del suo stato gentile	私は声高に語りたくはない。 我卑しくなるを恐れるが故に だが彼女の優雅な様をお話ししよう
II volta	a rispetto di lei leggermente, donne e donzelle amoroze, con vui, ché non è cosa da parlarne altrui (Dante, La vita nuova XIX)	彼女を敬いて少し、 愛らしいご婦人方娘子どもの、あなたがたに 他の方にお喋りすることではないので

バッラータ；イタリアのポエジーアでも最も古いものの一つである。その名称が示すようにその構造は音楽的モチーフと深く結び付いていた。音楽に合わせて輪になって踊りながら歌われるのである。バッラータは一つ以上のスタンツァと一つの“反復節”（ripresa）で構成される。反復節は輪に加わった踊り手たち全員で合唱され、スタンツァは交替で踊りの輪をリードする一人によって歌われ、各スタンツァの後に再び反復節が合唱される。スタンツァは二つの piede（脚）と反復節、piede と異なる音楽モチーフの volta（転）から構成される。volta の韻律構造と反復節のそれとは似ていなければならない。バッラータに最もよく使用される詩行は十一音節詩行に七音節詩行を組み合わせた形式である。韻形式は様々であるが、各々のスタンツァの最後の詩行の韻は反復節の最後の詩行の韻と一致しなければならない。

ripresa	Ballata i' vo' che tu ritrovi Amore, e con lui vade a madonna davante, sì che la scusa mia, la qual tu cante, ragioni poi con lei lo mio <u>signore</u> .	バッラータよ、我甚望汝愛の神と巡り会い 彼（愛神）と共に我が淑女のもとに行き 汝我が詫びを歌い 我が主（愛神）がかの人と語らんことを
1°piede	Tu vai, ballata, sì cortesemente, che senza compagnia dovresti avere in tutte parti ardire;	汝バッラータよ、礼を尽くして訪れよ 連れなけれど 何事にも勇気をもって
2°piede	ma se tu vuoi andar sicuramente, ritrova l' Amor pria, ché forse non è bon senza lui gire	だが無事に行きたくば まず愛の神に巡り会わんことを、 愛神なくして行くことは良からず
volta	però che quella che ti dee audire sì com' io credo, è ver di me adirata: se tu di lui non fossi accompagnata, leggermente ti farà disnore. (Dante, La vita nuova XII)	愛神が汝から聞かざらぬことは 我が思うがごとく、まこと我への苛立ちである： 汝かれ（愛神）につきそわれずば 少しく彼は汝を軽蔑するであろう。
	Per una ghirlandetta ch' io vidi, mi farà	我が見し花輪のために 全ての花が我に

sospirare ogni fiore.

I' vidi a voi, donna, portare
ghirlandetta di fior gentile,
e sovra' a lei vidi volare
un angiolel d' amore umile;
e 'n suo cantar sottile
dicea : «Chi mi vedrà
lauderà' l mio signore. »

Se io sarò là dove sia
Fioretta mia bella a sentire,
allora dirò la donna mia
che port' i testa i miei sospire.
Ma per crescer desire
mia donna verrà
coronata da Amore

Le parolette mie novella
che di fiori fatto han balata
per leggiadria ci hanno tolt' elle
una veste ch' altrui fu data:
però siate pregata,
qual uom la canterà,
che li facciate onore.

(Dante, Rime XV)

Perch' i no spero di tornar giammai
ballata, in Toscana,
va' tu, leggera e piana
dritt' a la donna mia,
che per sua cortesia
ti farà molto onore.

Tu porterai novelle di sospiri
piene di dogli e di molta paura:
ma guarda che persona non ti miri
che sia nemica di gentil natuura:
ché certo per la mia disaventura
tu saresti contesa,
tanto da lei ripresa
che mi sarebbe amngoscia:
dopo la morte, poscia,

溜め息をつかせるであろう。

我は見し、淑女よ、あなたが戴いているのを
美しき花輪を
その上に飛翔するのを見し
慎ましき愛の天使が ;
その細やかな歌声のなかで
曰く : 《我を見し者は
我が主を讃えるであろう》

我もし (彼女の語るを) 聞かんとして
我が美しきフィオレッタの在りし所こ在れば
さすれば我語るであろう我が淑女は
頭上に我が溜め息を戴けりと。

(我が) 望を大きくせんがため
我が淑女は
愛神にて戴冠されるであろう。

花のバッラータを作りし
この我が新生の言の葉は
雅のために他 (の歌) に与えし
衣 (調べ) を採ってきた :
だがどなたがこれを歌われようと
歓迎してあげてくれますように。

バッラータよ我はもう
トスカーナには帰えることを望まない
お前が速やかに静かに行ってくれ
真っすぐに我が淑女のもとに
すると彼女は丁寧に
お前を迎えてくれるだろう

苦悩と恐怖に溢れた溜め息の
物語をもって行っておくれ
だが気を付けておくれ見られぬように
誠実な心根の人の仇となるようなひとに :

わが不運のために
彼女に叱責され
断られるであろう故
それはわたしにとって苦悩となるであろう :
死後後々、

pianto e novel dolore.

Tu senti, ballatetta, che la morte
mi stringe sì, che vita m' abbandona;
e senti come' cor si sbatte forte
per quel che ciascun spirito ragiona.

Tanto è distrutta già la mia persona,
ch' i non posso soffrir:
se tu mi vuoi servire,
mena l' anima teco
(molto di ciò ti preco)
quando uscirà del core.

Deh, ballatetta mia, a la tua amistate
quest' anima che trema raccomando:
menala teco, nella sua pietate,
a quella bella donna a cu' ti mando.

Deh, ballatetta, dille sospirando,
quando le se' presente:

“Questa vostra servente
vien per istar con voi
partita da colui
che fu servo d' Amore”

Tu, voce sbigottita e deboletta
ch' esci piangendo de lo cor dolente
coll' anima e con questa ballatetta
va ragionando della strutta mente.

Voi troverete una donna piacente,
di sì dolce intelletto
che vi sarà diretto
starle davanti ognora.
Anim', e tu l' adora
sempre, nel su' valore.

(Cavalcanti, Perch' no spero)

マドゥリガーレ；語源は定かではない。chiesa madre（本寺）で歌われた教会音楽に係わりが求められている。ペトラルカ、サケッティらによって徐々に詩形は形成されて行き十四世紀から十八世紀に流行した。接吻韻（rima baciata）の十一音節詩行を従えた二、三の詩節から構成されている。韻は ABC/ ABC/ DD; ABA/ BCB/ CC; ABB/ ACC/ CDD; ABB/ CDD/ EE; ABB/ CDD/ EE/ FF; ABB/ CDD/ EFF/ GG 等；三つの詩節からなる場合には接吻韻の詩行を欠く場合がある。

嘆きと新たな苦しみに。

おまえは、バッラータよ、わかっている
死かかすも我に迫り、命が我を見捨てていることを
お前はきこえるこの胸がまがしく打つのを
各のが魂が語ることに。

我が姿形はこんなにくらぶれ
我は耐えがたし
汝われに仕えんと欲するならば
我が心を汝とともに導けよ
(大いに汝にこれをねがう)
我が胸より出るときは。

ああ、わがバッラータよ、汝の友情に
震えるこの心を委ねん：

汝とともにこれを慈悲深き彼の女(ひと)に導けよ
汝を遣わすあの麗しき婦人のもとに
嗚呼、バッラータよ、彼女に嘆き伝えよ
彼の女の前に在りしおりは：

“このあなたの下女は
貴女とともに在る為に参りましたと
愛の僕である人から発し。

汝、悩める心より嘆き出
茫然（啞然）とした弱々しい声よ
この魂とこのバッラータもて
憔悴した気持ちを伝えよや。

貴方がたは見いだすであろう
かくも甘美な知性を備えた魅力ある女性を
貴方がたも喜びであろう
いつも彼の女（ひと）の前に在ることは
魂よ、汝彼の女（ひと）を讃えよ
絶えず、彼の女（ひと）の徳を

Sovra la riva d' un corrente fiume
Amor m' indusse, ove cantar sentia,
sanza saver onde tal voce uscia;
la qual tanta vaghezza al cor mi dava
che 'nverso il mio Signore mi mosse a dire
da cu' nascesse sì dolce disire.

ed egli a me come pietoso sire
la luce volse, e dimostrommi a ditto
donna cantando, che sedea sul lito,
dicendo: 'Ell' è de le ninfe di Diana,
venuta qui d' una foresta strana
(Sachetti, le ninfe di Diana)

Un piccolo infinito scampanio
Ne ronzia e vibra, come d' una festa
assai lontana, dietro un vel d' oblio.

Là, quando ondando vanno le campane,
scoprono i vecchi per la via la testa
bianca, e lo sguardo al suol fisso rimane.

Ma toni gli occhi sgranano i bimbettì,
cui trema intorno il loro cielo sereno.

Strillano al crepitar de' mortaretti.
mamma li stringe all' odorato seno.

(Pascoli, Festalontana)

最後に主に恋心を歌うのに用いられた庶民的な詩形 **Strambotto** と **Stornello** と呼ばれる形式に触れておく。最初は十四世紀にトスカーナで花開き十六世紀にシチリアで大流行した。北イタリアでは ABABAB (AB)、ABABCC (DD)、ABABABCC、AABCC (DD) 韻から成る六又は八行の詩形が優勢であったが、シチリアでは ABABABAB が好まれオッターバ・シチリアーナと呼ばれていた。トスカーナでは ABABCCDD の韻形式が好まれ、“Rispetto toscano” と呼ばれていた。元来は愛する女性に対する敬意を含んでいたからである。

Quando brillava il vespro vermiglio,
e il cipresso pareva oro, oro fino,
la madre disse al piccoletto figlio:
Così fatto è lassù tutto un giardino.
Il bimbo dorme, e sogna i rami d' oro ;
gli alberi d' oro, le foreste d' oro
mentre il cipresso nella notte nera
scagliasi al vento, piange alla buftra.
(Pascoli, Fides)

流れる河縁に
愛が我を誘う、其処で歌声が聞こえ
その声何れの方よりい出しか知らず；
我が胸に優美（愛さしき）を与う
我が主われに向かって日く
かくも香しき望み生まれしと
主は慈悲深き陛下のごとく
われに目を向け我に指し示められし
歌いつつ渚に座しし女性を
曰く：ディアナの妖精なり
不思議の森より此処に來りしと

たえまなく鳴り響く小さな鐘の音
鳴り響く、祭りの鐘のごとく
遠くの遠くの、忘却の闇の彼方の

彼方、鐘波打つ中、
翁たちが道すがら白き頭現し
地面に眼差し注ぐ

幼子等は円く目を見開き
その回り穏やかな晴天打ち震え。

爆竹の破裂に叫びを上げる。
マンマは香しき胸に子を抱き締める。

朱い夕日輝き
糸杉は黄金、澄んだ黄金のよう
母は幼い息子に言う：
お空の上は全部こんなお庭なのよ
子は眠り、夢見ている黄金の枝を：
黄金の樹木、黄金の森を
片や糸杉は闇夜に
風に逆らい、嵐に呻いている。

ストルネッロはストゥランボットから派生した詩形であり、今日優勢な形式は aBA 韻形式の三行詩であり、一行目は七音節詩行か五音節詩行であり、花の名前を含まねばならない。そのために Fiore (花) とも呼ばれている。さらに韻 A は韻 B と似ていなければならない。

Fior <u>tricolore</u> ,	三色堇、
tramontano le stelle in mezzo al mare	星は海原に沈み
e si spengono i canti entro il mio <u>core</u> .	歌は我が胸中に消えんとす。

パスコリの師カルドゥッチの歌えなくなった晩年の胸中を詠じたものである。

なお音量（発音に要する時間）に基づく古典ギリシャ、ラテンの作詩法がカルドゥッチやパスコリに採用されたがこれには触れないでおく。二十世紀に入ってから詩はこのような規範や形式からは解放されたが、イタリア詩の歴史を通観してみると、十九世紀末まで、つまりパスコリまではイタリアの詩人達は上に見て来たような一定の規則と形式に則って作詩を行ってきた。“先ず形式ありき”であった。これらの緒規則を巧みに使いこなすことが詩人の腕の見せ所であった。このような規範、形式に則らないものは詩とは見なされていなかったと考えるのが至当である。